茶話

昭和二（一九二七）年

薄田泣菫

青空文庫

1

かういふ話がある。

ある時、山ぞひの二また道を、若い男と若い女とが、どちらも同じ方向をさして歩いてゐたことがあつた。

二また道の間隔は、段々せばめられて、やがて一筋道となつた。見ず知らずの二人は、一緒に連立つて歩かなければならなくなつた。

若い男は、背には空になつた水桶をかつぎ、左の手には鶏をぶら提げ、右の手には杖を持ちながら、一頭の山羊をひつぱつてゐた。

道が薄暗い渓谷に入つて来ると、女は気づかはしさうに言葉をかけた。

「わたし何だか心配でたまらなくなつたわ。こんな寂しい渓谷を、あなたとたつた二人で連立つて歩いてゐて、もしかあなたが力づくで接吻でもなすつたら、どうしようかしら。ほんたうに困つちまふのよ。」

「え。僕が力づくであなたを接吻するんですつて。」男は思ひがけない言ひがかりに、腹立ちと可笑しさとのごつちやになつた表情をした。「馬鹿をいふものぢやありません。僕は御覧の通り、こんなに大きな水桶を脊負つて、片手には鶏をぶら提げ、片手には杖をついて、おまけに山羊をひつぱつてるぢやありませんか。まるで手足を縛られたも同然の僕に、そんな真似が出来よう筈がありませんよ。」

「それあさうでせうけれど……」女はまだ気が容せなささうに言つた。「でも、もしかあなたが、その杖を地べたに突きさして、それに山羊を繋いで、それから背の水桶をおろして、鶏をそのなかに伏せてさへおけば、いくら私が嫌がつたつて、力づくで接吻すること位出来るぢやありませんか。」

「そんなことなんか、僕考へてみたこともありません。」

男は険しい眼つきで、きつと女の顔を睨んだが、ふとその紅い唇が眼につくと、なんだか気の利いたことの言へる唇だなと思つた。

二人は連立つて、薄暗い樹蔭の小路に入つて往つた。人通りの全く絶えたあたりに来ると、男は女が言つたやうに、杖を地べたに突きさして、それに山羊を繋ぎ、背の水桶をおろして、鶏をそのなかに伏せた。そして女の肩を捉へて、無理強ひに接吻したといふことだ。

2

この場合、若い男は初めのうちは何も知らなかつたのだが、女の敏感な警戒性が、思はず洩らした一言に暗示せられて、それを実行に移したのである。善行にせよ、悪業にせよ、すべて男の勇敢な実行の背後には、得てしてかうした婦人の暗示が隠れてゐるものだ。

青空文庫情報

底本：「完本　茶話　下」冨山房百科文庫、冨山房
　1984（昭和59）年2月28日第1刷発行
　1988（昭和63）年7月25日第7刷発行
底本の親本：「中央公論」
　1927（昭和2）年5月1日
初出：「中央公論」
　1927（昭和2）年5月1日
※〔〕内の編集者による注記は省略しました。
入力：kompass
校正：仙酔ゑびす
2014年10月13日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

茶話

昭和二（一九二七）年

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

著者　　薄田泣菫
URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/